

龍門騒動 200 周年に向けて

天理大学文学部前教授 谷山 ふ道

ひつじえ
ひよしもんそうごうは



のです。この年、江戸の領主のもとから派遣されてきた役人濱嶋清らが、例年よりも年貢の米納分を増やして品質を厳しく吟味するとともに、銀納分についても納入値段のつり上げをばかり、領民の声を無視して増徴を強行しようとしたことが「一揆の原因」でした。

龍門騒動は、文政元年（一八一八）の年末に、旗本中坊氏の知行地で起きました。十二月十五日の夜に、中坊氏の支配下にあつた吉野郡内の五ヶ村（石高合計で三五〇〇石）のうち、矢治村を除く、小名・柳・香東・平尾・西谷・峯寺・志賀・滝畠・立野（現吉野町内）と、西増比曾・矢走・持尾・岩壺（現大淀町内）の計一四か村の百姓数百が、竹槍を携えて平尾村にあつた代官所へ押し寄せたす。

せられました。なお、処分の申し渡しまでに、主謀者の又兵衛さんや「死罪」とされた三人をはじめ、この一揆に関わった二十七人がすでに命を落としていました。そのほとんどは、奈良奉行所での厳しい取り調べによるものでした。

こうした多くの犠牲者を出して、一揆は終結しましたが、一揆の精神は、「一とどえ、龍門騒動は大騒動二十までつづった手まり唄、うたおうかいな」で始まり、「二十でおさまるこの唄はうとうておくれ孫子供たのむわいな」で終わる手まり唄に託して、後世まで伝えられていくことになったのです。

このまま残されています。

龍門騒動は、第一次世界大戦後、国民的歴史学運動が推進されるなかで注目され、木村博一氏によつて、掘り起こしが行われました。その成果は、「大和の龍門騒動」と題する論文（『歴史評論』四二号、一九五三年）などとして、まためられています。それから六五年ほどにあります「龍門騒動を考える会」のメンバーの方々とも連携しながら、この一揆の実

代官所への強訴を企てたのは、西谷村細崎の又兵衛さんや源八さんでした。領内の村役人らは、合法的な形で年貢の引き下げを求める訴願を行っていましたが、これでは埒が明かないないと判断した又兵衛さんは、領内の各村へ張紙をして、一揆への参加を呼びかけました。これに応じた百姓たちが、打ち合わせどおりに

百性たちを痛めつけた役人の殺害にまで及んだという点で、全国的に珍しいケースでした。それ故に处罚も厳しく、主謀者の又兵衛さんが「奈良町引き廻しのうえ陣屋の近くで獄門」、西谷村の林蔵さんなど三人が「死罪」、一七人が「重追放」、五人が「所払」、六六人が「過料」罰金刑とされたほか、関係した一四か村、年預庄屋と各村の庄屋・年寄・惣百姓にも、それぞれ「過料」が課

像を明らかにする作業を進めていきたいと思っています。

[著者紹介]
谷山 正道（たにやま まさみち）

専門は大和を中心とした江戸時代（特に民衆運動）について。広島大学博士（文学）。広島大学助教授を経て天理大学文学部教授。（一〇）七年三月退職。
主な著書に、『近世民衆運動の展開』（一九九四）、『奈良県の歴史（一〇）』、『民衆運動からみる幕末維新（一〇）』など。吉野町では（一）五年・（一）六年に龍門騒動についての講演を行つていただいている。

